連載

今こそ聞きたい！決済高度化入門

第2回

大口決済の高度化①
～時点決済からRTGSへ

麗澤大学
経済学部　教授
中島　真志

時点決済システムとその脆弱性

決済高度化は、もともと「大口決済システム」から始まった。大口決済システムとは、銀行間の資金取引など、金融市場における大口資金の決済を中心に取り扱う決済システムであり、各国では中央銀行がその運営にあたっている。日本の「日銀ネット」、米国の「Fedwire」、EUの「TARGET2」などがこれにあたる。1980年代には、これらの大口決済システムのほとんどは、1日に1回の「ネット決済」を行う「時点ネット決済システム」であった。つまり、決済システムに参加する銀行の間で、お互いの支払いと受取りの差額（ネット・ポジション）を算出し、その差額を1日の終わりに支払う（または受け取る）という仕組みであった（図表1）。

ただ、時点決済システムは、「決済リスク」について二つの脆弱性を有していた。一つは、1日の最後に最終的な決済が行われるまでの間、未決済残高が次々と累積していき、決済リスクが1日の最後まで残ってしまう点である。そうした状態で、仮に最終的に当日の負けポジションが支払えないという銀行（デフォルト行）が出てきた場合には、他の多くの銀行が資金を受け取れなくなり、大きな問題が発生することになる。

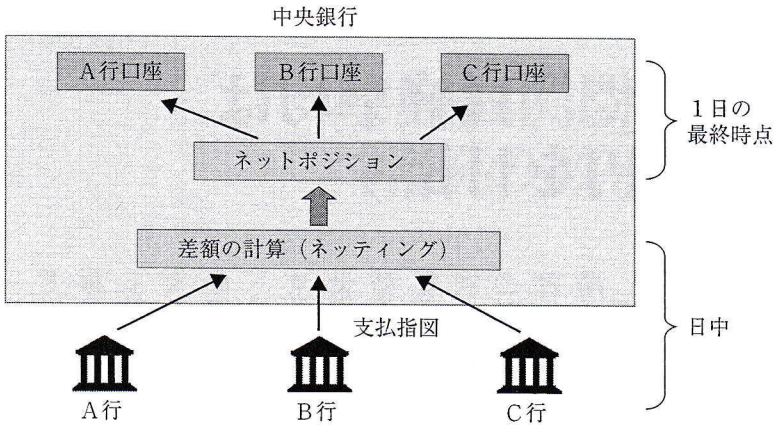
もう一つが、「システミック・リスク」の問題である。これは、ある参加者（銀行）が支払不能となることにより、決済システムの他の参加者の支払いが連鎖的にストップし、これが金融システム全体の混乱に波及するリスクのことである。時点ネット決済では、ある銀行が決済不能となった場合には、その銀行を除いて差額の計算をやり直す「組戻し」（アンワインディング）という仕組みがあり、これを通じてシステミック・リスクを引き起こすリスクがある。

金融取引の拡大とともに決済ボリュームが増大し、それにつれて決済リスクが膨張する中で、大口決済システムを運営する中央銀行では、こうした時点決済システムのリスク面の脆弱性に危機感を募らせるようになった。

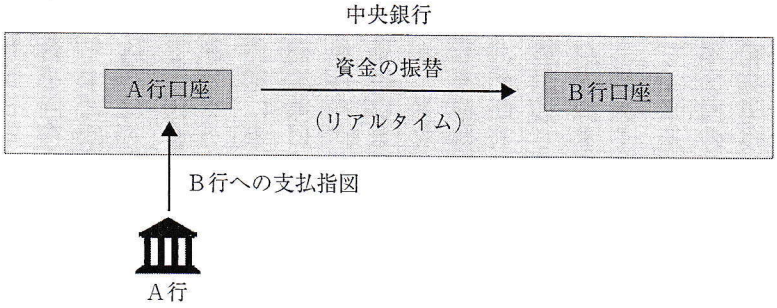
RTGSシステム進展の背景

こうした中で、中央銀行が目を付けたのが「RTGS（Real-Time Gross Settlement）」という決済方法であった。RTGSシステムは、個々の支払い指図を1件ごとにグロスで決済し、その場でファイナルなものとしていく仕組みである（図表2）。このため、日中に未決済残高が積み上がることはなく、システミック・リスクも発生しない。つまり、RTGSシステムは

〔図表１〕　時点ネット決済システムの仕組み



〔図表２〕　ＲＴＧＳシステムの仕組み



「決済リスクに強い」という性格を有している。こうした決済リスク面のメリットから、ＲＴＧＳを採用する中央銀行は徐々に増えていき、「決済システムのＲＴＧＳ化」が世界的に進展していった。

ＲＴＧＳ化の動きは、80年代後半から見られていたが（スウェーデン、スイス、ドイツなど）、これが一気に進んだのは90年代後半である。これには、意外なことにＥＵの通貨統合が深く関係している。当時、単一通貨「ユーロ」の導入にあたって、通貨ごとに作られていた各国の決済システム（独の決済システムと仏の決済システムなど）を相互につなぐことが必要となった。ユーロの金融市場を一体的に運営するためには、例えばイタリアの銀行とスペインの銀行が国境を越えて円滑にユーロの資金をやり取りできるようにする必要性があった。

そのために作られたのが、「ＴＡＲＧＥＴ」という決済システムである。このシステムを導入する際に、一方が即時にグロス決済を行うＲＴＧＳシステムで、他方が1日の終わりにネット決済を行う時点ネット決済システムという状態では、両者をつないで決済を行うことは原理的に不可能だ。このため、ＴＡＲＧＥＴに接続するには「ＲＴＧＳシステムであること」が必須条件とされた。こうしたＲＴＧＳの義務化を受け、ユーロの導入（99年）を控えた96～97年ごろに、ＥＵでは一斉に決済システムがＲＴＧＳ化された。

グローバルスタンダードとしてのＲＴＧＳシステム

アジア太平洋地域でも、90年代半ばからＲＴＧＳ化の動きが広がり、韓国、タイ、香港、豪州、ニュージーランド、シンガポールなどでＲＴＧＳシステムが次々と導入された。日本でも、こうした動きを受け、２００１年に「日銀ネットのＲＴＧＳ化」が行われた。日銀ネットは、もともと時点ネット決済のモードとＲＴＧＳモードという二つの機能を有していたが、実際にはほとんどが時点ネット決済のモードで決済が行われており、事実上、時点ネット決済システムとして機能していた。このため、日本銀行では時点ネット決済のモードを廃止することで、日銀ネットをＲＴＧＳ化した。

その後、ＲＴＧＳシステムは、東欧、中南米、中東、アフリカなどにも広がりを見せた。こうしたＲＴＧＳシステムの広がりには、国際決済銀行が「ＲＴＧＳレポート」（１９９７年）を出して、ＲＴＧＳシステムのメリットを訴え、利用拡大を促したことも影響している。

世界銀行の調査によると、すでに世界の約９割の国において、ＲＴＧＳシステムが採用されている。大口決済システムをＲＴＧＳ化して運営することは、今やグローバル・スタンダードとなっている。